News Letter
都市史研究
73
The Urban Historical Society of Japan
Vol. 2013 0318

桜のつぼみも膨らむころ、皆さまにおかれましてはますますご清栄のこととお喜び申し上げます

ニューズレター都市史研究73号をお届けいたします。まず、7年間にわたり活動をつづけてまいりました「とらっど３」を代表して吉田伸之・伊藤毅両氏からご挨拶を申し上げます。

本号では、2012年12月に開催されたふたつのシンポジウム、「沼地と都市」（都市史研究会＋とらっど3主催）および「歴史都市の空間・文化・持続再生」（科研・基盤研究A主催・代表伊藤毅氏）についてご報告いたします。また2013年2月に行われました第76回都市史研究会例会に関してもあわせてお伝えいたします。新刊紹介では年報都市史研究20号のご紹介、さらに巻末には松田法子氏によるエッセイを掲載しております。

とらっど３としては本号が最終号となりますが、2013年度以降も都市史研究会は引き続き精力的な活動を続けていく所存ですので、皆さまのご理解とご協力のほどをよろしくお願いいたします。

「とらっど3」を閉じるにあたって

とらっど３は2013年3月末日をもって発展的に閉じることになります。まずは7年にも及ぶとらっど３の諸活動にご協力・ご尽力いただいたみなさまに深謝申し上げます。

とらっど３にいたる道のりはたいへん長く、20年に及ぶ歴史があります。とらっどの前史として「ぐるーぷ・まんもす」という不定型な研究者集団が発足したのが1992年（「前近代・巨大都市の社会構造に関する総合的研究」研究代表者=吉田伸之：科学研究費（以下、科研費）・総合研究（A）1992〜1994年度）、その後3年間の空白期間はありましたが、共同研究の場としての都市史研究会は定期的に行われ、そして1997年から今年にいたる17年間、ぐるーぷ・とらっど（「日本型伝統都市の社会=空間構造に関する基盤的研究」研究代表者=吉田伸之、科研費・基盤研究（A）1997〜2000年度）、とらっど２（「伝統都市の社会=空間構造と諸類型に関する基礎的研究」研究代表者=吉田伸之：科研費・基盤研究（A）2001〜2004年度）、そしてとらっど３（「十六〜十九世紀、伝統都市の分節的な社会=空間構造に関する比較類型論的研究」研究代表者=吉田伸之：科研費・基盤研究（S）2006年〜2010年度、「都市イデアの生成と変容に関する空間論的研究」研究代表者=伊藤毅：

科研・基盤研究（A）2006〜2008年度、「都市インフラストラクチャーの史的比較研究」研究代表者=伊藤毅：科研・基盤研究（A）2009〜2012年度）と立て続けに科学研究費の補助を得つつ、活発な共同研究の成果が蓄積されてきました。

とりわけ2006年から2013年の7年間は幸運なことに吉田伸之氏の科研基盤(S)と伊藤の科研基盤(A)が切れ目なくつながり、成果としては数多くの国際集会、ラウンドテーブル、それらを母体とした『別冊都市史研究』（山川出版社）、毎年の地道な活動を反映した『年報都市史研究』（山川出版社、13〜20号）の編集刊行、そして吉田・伊藤編のシリーズ『伝統都市』全四巻（東京大学出版会、2010年）という果実をうみました。その間、研究者集団は当初の日本近世史と建築史から大きく拡がり、日本古代史、中世史、近代史はもとより東洋史、西洋史、考古学、国文学などの諸領域との連携が可能になり、海外にも多くの研究者仲間ができました。

その間、長野県飯田市には飯田市歴史研究所という地域史を恒常的に行う画期的な施設が実現し、また吉田・伊藤の「学的融合による都市史研究プラットフォームの構築」という業績に対して、2012年度日本建築学会賞が与えられました。

建築史の分野でも日本建築学会 建築歴史・意匠委員会に都市史小委員会という研究者集団が立ち上がったのが1999年で、毎年のように充実したシンポジウムが積み上げられて、いまや建築史学のなかで数十人に及ぶもっとも多くの優秀な若手を擁する一大研究者集団が形成されたのも、この期間でした。

東京大学でもこの間、COEおよびGCOEで建築学・社会基盤学・都市工学が連携して「都市空間の持続再生学の創成」「都市空間の持続再生学の展開」がそれぞれ5年ずつ計10年間（2002〜2006年度、2007〜2012年度）「持続」したことも特記すべき事柄でした。

1990年代から2000年代は、まさに都市史学にとって忘れることのできない20年であったと思います。こうした場に居合わせることのできた僥倖にただただ感謝するとともに、これからさらなる発展に向けて心機一転邁進していきたいと考えています。2013年以降の活動はまだ具体的にお示しすることはできませんが、さまざまな研究活動を以前にも増して積極的に展開していくこと、その成果を格段に広げつつ社会にむけて還元していくこと、そして国内外を視野に入れた研究のプラットフォームをより堅固なものとし、その舞台を拡大していくことを目指します。とらっど３はいったんここで閉じますが、次なる展開はますます充実・加速化することが期待されますし、おおげさな物言いになるかもしれませんが、「都市史学」という学問領域が人類の居住史を再考するための基礎学となるべき時がまもなく到来するような予感さえします。ぜひ今後ともよろしくお付き合いくださいますよう。

吉田伸之・伊藤毅（文責・伊藤）

都市史研究会シンポジウム「沼地と都市」

2012年12月15日、16日、東京大学工学1号館15号教室にて都市史研究会およびとらっど３の共催によるシンポジウム「沼地と都市」を開催いたしました。当日は伊藤毅氏（東京大学）による主題報告にはじまり、石崎俊哉氏（東京都埋蔵文化財センター）、髙山慶子氏（宇都宮大学）、髙橋元貴氏（東京大学）、宮脇哲司氏（東京大学）、高橋慎一朗氏（東京大学）、赤松加寿江氏（東京大学）による研究報告が行われました。以下に参加記を掲載いたします。

参加記

昨年12月15日、16日の二日間にわたり、都市史研究会ととらっど３主催によるシンポジウム「沼地と都市」が開催された。両日を通して計6名の報告者による研究報告が行われ、最後に全体討論が行われた。司会進行は武部愛子氏と東辻賢太郎氏が務めた。以下、二日間にわたる各報告と議論を振り返りたい。

一日目、まず伊藤毅氏（東京大学）から、本シンポジウムの趣旨説明がなされ、沼を水と陸の中間形態ととらえ、沼をキーワードとして都市を見ることの意義が論じられた。

続いて石崎俊哉氏（東京都埋蔵文化財センター）より「沿岸域における大名江戸屋敷の形成―汐留遺跡―」と題し報告がなされた。石崎氏は汐留遺跡の発掘調査から、近世期における大名江戸屋敷の造成過程を明らかにし、屋敷地化にあたり大規模な地盤改良や埋立を必要とした同地域の造成は、江戸という都市のインフラ整備の一環としてなされたと論じた。

続く髙山慶子氏（宇都宮大学）は、「江戸深川猟師町の形成と深川地域の開発」において、近世期の本所・深川地域の開発過程を明らかにした。自力開発から幕府による計画的な都市開発へと開発主体が変化する中で本所・深川地域は完成するが、開発が完了したのちも、近世期を通じて同地域において水害が克服されることはなかったと論じた。

続いて髙橋元貴氏（東京大学）は、「近世オランダ・フリースラント小都市の社会と空間」と題し報告を行った。人工的微高地＝テルプを核とした沼地の開発による都市化が行われたオランダのフリースラント諸都市のひとつについて、16世紀から19世紀を対象に、土地の都市社会に対する拘束性とその解体過程を明らかにした。同地域の家屋・土地所有の分析から、小規模都市の特質として、巨大都市と同様資本集中による土地構造の形成がみられる一方で都市空間の拡張なしに維持・持続が行われていた可能性を指摘した。

二日目は、宮脇哲司氏（東京大学）の報告「オランダ・フリースラント、低地地域における都市形成」から始まった。宮脇氏は、オランダのフリースラント諸都市について、近世期以前の諸都市の様態を復元的に考察し、都市内部のみならずその周縁も包含しながら同地域の形成過程を明らかにした。低地地域の都市を対象とする場合、地形の特徴が都市分析に有効な手段であると論じ、また対象地域のような諸都市は小規模都市という一つの尺度として考察が可能であると指摘した。

続く高橋慎一朗氏（東京大学）は、「沼＋港＝沼津？：中世の沼地と都市」において、中世から近世にかけての都市沼津の成立と変遷を追った。鎌倉期から室町期にかけて、沼津は河口付近の低湿地に港町として成立し、同地周辺の沼地は田畑として沼津住人の経済を支えていた。同地は近世期に至って東海道の宿へ移行していく。鎌倉後期から戦国期にかけて、河口近くの沼地縁辺に成立する中小の川湊都市は、日本中世都市の一類型だと論じた。

最後に赤松加寿江氏（東京大学）の報告「イタリア・アルノ川の流域整備とヴィラ」が行われた。16、17世紀を中心にトスカーナ大公国の地域支配に焦点を置き、ヴィラが地域戦略の拠点となっている様子、大公

による港の占有や市場の設置など沼周辺の土地利用が管理下に置かれ、大公専属の建築家集団による領域デザインがなされていたことを明らかにした。

その後、吉田伸之氏（東京大学）・野口昌夫氏（東京藝術大学）よりコメントがなされ、両名の問題提起や論点を受けつつ、全体討論が行われた。有意味な地帯を地帯構造として枠組み設定した上で、空間構造分析のみならず、社会構造分析を行う重要性が確認された。

各報告を通じて、個々の地域の特殊性と共通性が双方表されており、「沼地」という地帯をキーワードに自然と人間との関係性が浮き彫りになっていた。先年のシンポジウム「危機と都市」から、一層深められた課題意識の元、今後の展望へとつながるシンポジウムとなった。

下田桃子（東京大学大学院人文社会系研究科）

国際シンポジウム
「歴史都市の空間・文化・持続再生：都市インフラおよび〈領域〉的視座の国際比較」
—Space, Culture, and Regeneration of Cities in History: From the Viewpoint of International Comparison of Territory and Infrastructure—

2012年12月3、4日の両日にわたり伊藤毅氏（東京大学）の科研（基盤研究A）「都市インフラストラクチャーの史的比較研究」主催による国際シンポジウムを開催いたしました。初日は主催者代表伊藤毅氏の問題提起にはじまり、陣内秀信氏（法政大学）による基調講演がなされました。また両日にわたり、「水と領域」「山と領域」、そして「文化と技術」の三部構成でフランス・イタリア・オランダ・日本の研究者から計17本の研究報告がなされました。最後に吉田伸之氏から総括コメントとして小報告をいただき、報告者を中心とした全体討議が行われました。以下に参加記を掲載いたします。なおシンポジウムにおける各報告者や題目などの記録は、伊藤研究室HP上（http://itolab.org/archives/symposium2012）にて公開しておりますのであわせてご覧下さい。

参加記

「歴史都市の空間・文化・持続再生」と銘打たれた今回のシンポジウムは、オランダ、イタリア、フランスから研究者を招いた華やかなものであった。「沼地研究会」として各国と共同研究を推し進めてきた東京大学伊藤毅研究室の、これまでの成果を発表する場である。おそらくは、ヨーロッパでも各国の研究者が一堂に会する機会はそうはないのではないだろうか。これだけのフレームを設定した主催者の努力に、まずは敬意を表したい。

さて、近年の都市史研究では、都市を支えるものへの関心が強くなってきている。都市インフラ、技術、などの問題などがそうだが、今回は〈領域〉という語が取り上げられた。都市を、それを含む広域で捉えるみかた、つまり都市と後背地を扱う都鄙関係論では、従前はすぐに共同体論に回収されてしまうきらいがあった。村落の延長上に都市を見る、このような視点に対して、今回は都市から始めて、いわば都市インフラとしての領域へと対象が広げられている。

都市史における〈領域〉的視座としては、イタリアでいわれるテリトリオ研究が理論化の点で先んじている。陣内秀信氏のキーノートスピーチにて触れられたが、ティポロジアを提唱したムラトーリにおいて、すでにテリトリオという考え方が打ち出されていたという。80年代のイタリアでは、ペイサージオ（景観）と並んでテリトリオが認識のフレームとなっており、テリトリーそのものに歴史があることが主張されていた。このような研究が結実して、アッシジは歴史的中心地区のみならず、テリトリーを含めるかたちで世界遺産に認定されたのである。

テリトリオという考え方は、しかし、まったく耳に新しいものでもなく、近接して類似の概念も存在している。例えば、景観・ランドスケープは視線・意識の問題だが、文化的景観といえば、生産・生活を含んだ概念となる。ただ、これは特に都市に限定されたものではなく、棚田など対象は広く求めることができる。むしろまなざしの客体としては、都市外を設定することの方が容易であろう。都市を圏域で語ることでは、アジア・メガシティでいうEMR（拡大大都市圏域）も同様だが、こちらでは都市と農村の区別は曖昧な状態とされる。テリトリオでは、都市の存在そのものは揺るがないままで、その存立基盤としての領域を対象としているのである。

ところで、今回の個別発表では他にも〈領域〉的視座をめぐる問題設定がなされていた。日本における山林の空間史は、入会地の問題を内包しており、ローカルコモンズの問題へとつながっていく。フリースラントの研究では、オランダの小都市群の解析が披露されたが、都市間ネットワークを圏域に張り巡らせたランドスタットのようなオランダ都市群のあり様は、都市研究としては依然として可能性を感じさせた。

「沼地」という問題設定が、陸と水の接点に注目したものであったように、都市からひろく水の世界、山の世界へと分け入ったのが今回のシンポジウムの構成であった。そこで〈領域〉を対象とする今日的意味は、どこにあるのだろうか。

サウゾールがいうように、すべてが都市化した社会では、「都市」は特定空間の中での相対的な存在でしかない。このような都市における場所性の喪失がいわれて久しいが、〈領域〉という視座の導入は、もはや都市単体では場所性の回復は難しいということかもしれない。

近代の場所性・共同体の喪失を越えて、また、地域全体が壊滅する大災害を受けて、我々の認識の枠組みそのものが再考される必要がでていることは確かだろう。後段の議論の際に出された、社会と空間を切り離さない見方、また、ソーシャルパワーが規定するものと日常の場が拮抗することから紡ぎだされたもの、というとらえ方が、「〈領域〉的視座 」の方向性を見せている気がした。

大田省一（京都工業繊維大学）

第76回都市史研究会例会

2013年2月15日、東京大学文学部第3会議室にて第76回都市史研究会例会が行われました。当日は竹ノ内雅人氏（飯田市歴史研究所）による報告が行われ、活発な討議がなされました。以下、竹ノ内氏による報告要旨を掲載いたします。

報告要旨 江戸市中における「道場」の展開

本報告では江戸市中に展開した宗教施設のうち、町人地内で営まれた「道場」に関して検討を行い、修験や神職など勧進や祈祷によって生業を立てていた町人地の宗教者がどのような実態の元で社会関係を構築していたのかについて考察した。ここで取り上げる「道場」とは、町方に住む宗教者が仏や神を祭祀して、祈祷など宗教活動の拠点としていた空間を指し、旧幕府引継書や町触のなかで、神仏の区別無く、町方に開かれた宗教施設を表現している。

近世当初から続く町方の借地借宅を宗教施設化する動きについて、18世紀後期には新たな局面をみせ、地方の寺社が江戸へ進出して、宗教的活動を展開する拠点としての性格も帯び始めた。さらにこうした借地借宅で修験の設けた「道場」では毎月縁日が設けられ、植木屋をはじめとする出商人や「手遊び類」といった小商人が繰り出していた。

いっぽう幕府は天保元年（1830）から市中宗教者の不法行為のほか、「道場」の規制強化にも積極的に乗り出し始める。だが「道場」へ出入りする下層民の生業にも配慮したかたちの解決策は容易に出てこなかったようで、次善の策として町方から「道場」の書上を行わせて所在把握を進めるとともに、開帳などへの出商人の出入りを制限し、火事によって類焼した後の施設の再建を認めず、修験や陰陽師を町方人別へ加えて裏店へ居住させながら、やがては本寺本社へ収斂させるというロードマップを考え出した。つまり、市中宗教者の人別加入はこうした施設排除の施策とセットになった政策であった。単に都市宗教者の統制をはかった施策ではなかったのである。さらに天保7年（1836）9月の段階での所在把握数をみると、武家地の邸内社が56軒、町道場が当初600軒ほど存在し、その後病気などを理由に国許へ引き払った分が90軒余、さらに天保5年（1834）の火災などで類焼し再建を求めるものが56軒、差し引き市中に500軒ほどの「道場」が展開していたと寺社奉行は概算している。こうした数多くの「道場」が広く市中に展開し、人びとの信仰とともに宗教者の生業を成り立たせていたのである。

さらに坂本町一丁目・二丁目の事例をとりあげ、初発的には古跡地寺社の縁日・祭日をもとにしながら、参拝者に引き寄せられるかたちで植木屋などの小商人が蝟集、それに誘引されるように宗教者もさらに「道場」を構え、さらなる小商人の営業の場を提供していった、という流れが19世紀前半に展開していたことを明らかにした。しかし史料的な制約もあり、具体的な地主・家守層などの関与のあり方や、植木屋をはじめとする小商人集団内での動向は充分に明らかに出来なかった。

竹ノ内雅人（飯田市歴史研究所）

出版物のご紹介

2013年3月、山川出版社より『年報都市史研究』20号が刊行されます。特集といたしまして、2011年12月に都市史研究会およびとらっど３共催により開催いたしましたシンポジウム「危機と都市」を取り上げています。以下に内容をご紹介いたします。ぜひご一読ください。

都市史研究会編『年報 都市史研究』20号　山川出版社　2013年3月28日刊行予定

特集　危機と都市

シンポジウムの開催について

プロローグ—危機と都市　｜伊藤 毅

関東大震災復興期の共同建築——日本橋の不燃化を事例として　｜栢木まどか

三六災害と飯田・上飯田——「丘の上」近代化と大水害　｜本島和人

再帰する津波、移動する集落——三陸漁村の破壊と再生　｜青井哲人

安政江戸大震災と浅草寺寺院社会　｜吉田伸之

天正・文禄の大地震と京都改造　｜三枝暁子

論文

古琉球期における「浮島」那覇の造営と地域形成　｜髙橋康夫

研究ノート

隅田川口改良工事にみる築港理念の頓挫と再生——明治期東京港湾の都市史的考察　｜渡邊大志

書評

初田香成著『都市の戦後　雑踏のなかの都市計画と建築』｜高嶋修一

新刊紹介

橋本義則著『古代宮都の内裏構造』

網伸也著『平安京造営と古代律令国家』

橋本義則編『東アジア都城の比較研究』

伊藤裕偉著『聖地熊野の舞台裏——地域を支えた中世の人々——』

川岡勉・古賀信幸編『日本中世の西国社会２　西国における生産と流通』

江戸遺跡研究会編『江戸の大名屋敷』

亀長洋子著『世界史リブレット106　イタリアの中世都市』

野口昌夫編著『ルネサンスの演出家ヴァザーリ』

アンソニー＝フリント著、渡邉泰彦訳『ジェイコブス対モーゼス—ニューヨーク都市計画をめぐる闘い—』

クロスロード（都市史の交差点）

建築におけるアウト・オブ・スケールという概念——西洋と東洋的観点の比較

｜フェデリコ・スカローニ（高佳音訳）

ラウンドテーブル

十八〜十九世紀：伝統都市の自治と公共秩序—リールとブリュッセルを事例に　｜長井伸仁

都市史を歩む２

都市史研究を始めたころのこと　｜松本四郎

時評

現代都市事情14——品川　｜伊藤 毅・吉田伸之

別府と写真絵はがき

松田法子（京都府立大学）

絵はがきの別府

昨年『絵はがきの別府 –古城俊秀コレクションより–』（左右社）という本を出す機会に恵まれた。

別府は、近世以来の別府村・浜脇村などを母体として温泉関連業により明治期以降に大幅な拡大を遂げ、国内最大規模の温泉町になった。さきの本は、別府温泉を写した明治末期から昭和初期の写真絵はがきと別府の都市史に関するテキストから構成している。

本に載っている絵はがきは、大分市在住で元郵便局長の古城氏が約40年にわたって蒐集したものだ。はじめて見せて頂いた時の絵はがき群は、様々な内容と時代にわたる膨大な情報の切片だった。それらは何らかのかたちで〈別府〉に関係している、ということでつなぎとめられていた。わたしがまず関心をもったのは、これまでに氏が絵はがきを仕入れてきた市の場所だった。彼が赴く市は福岡など九州各地のほか、愛媛や大阪、京都だという。それは浴客や働き手、資本などの点で近代別府が結びついていた圏域そのものだった。

写真絵はがきと都市

仮に絵はがきを記念と記述、写真を記録と記号のメディアと捉えれば、写真絵はがきはこれら四つの性格を備えることになるだろう。写真絵はがきの面白いところは、マクロスケールからミクロスケールまで様々な空間の範囲が絵はがきという同じ一枚の寸法で切り取られているところだ。私たちはそれらをあたかも同列であるかのように手にとって眺める。そのとき私たちの目は、巨視的・微視的なレンズを自動的に持ち合わせているといえるだろう。鳥瞰的な眼と虫瞰的な眼をあわせもつことは、都市史研究の経験とも似ている。

絵はがきに写るもの

さて本の冒頭に収録した絵はがき「豊後別府 的ヶ濱」には、つぼめた和傘を差し掛けながら歩む三人の人物が点景として配されている（図1）。この構図からは歌川広重『東海道五十三次』の「蒲原」などがただちに想起され、江戸時代から続く伝統的な名所像が投影されていることに気づく。しかしこの的ヶ浜には「蒲原」のような雪も雨も降ってはいない。ここには発行元の「萩原号」あるいは写真師の演出による名所の光景が創り出されている。

的ヶ浜の内陸には海門寺という寺があり、一帯は墓地だった（図2）。そればかりでなく、ここには避病院（コレラなどの伝染病専門病院）や火葬場、と畜場が建てられていた。図1の写真絵はがき左端に写り込んでいる煙突は火葬場のものである。同時に浜は、さまざまな人たちの居住地でもあった。大正11年（1922）に、皇族の別府来訪にともなって的ヶ浜の松林にあった小屋を警察が焼き払うという事件が起きた。この一件から、的ヶ浜には80名もの人々が居住していたことがわかっている。赤十字社大分支部総会に主席するために赤十字総裁の閑院宮が別府を訪問する計画がおこり、これに備えて別府署は小屋を焼き払ったのである。住人の一人であった浄土真宗の布教師である篠崎蓮乗が運動し、水平社結成のきっかけのひとつをつくったとされる。

図1. 絵はがき「豊後別府 的ヶ濱」（明治末期〜大正中期）
（以下、掲載絵はがきはすべて古城俊秀氏所蔵）

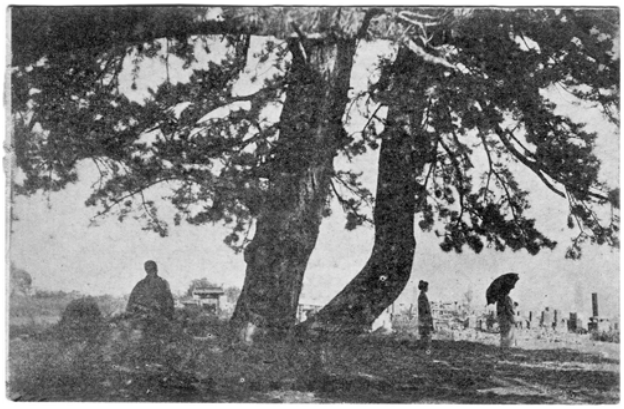

図2. 絵はがき「別府海門寺の孤松」（明治末期〜大正中期）

名所や観光地は、ある部分ではそれとして整えられ、つくりあげられていく性質をもっている。的ヶ浜は名所や観光地にかんする感性と政治の力学がせめぎ合う渚であった。写真絵はがきによって切り取られる的ヶ浜には写真師が心に描く名所のイメージが投影されているが、同時にその場面には場所に根ざす的ヶ浜の社会もまぎれなく写り込んだ。

絵はがきの製作発行者

明治から大正期、別府の写真絵はがきは主に別府の写真店や印刷所によって製作された。「萩原号」と「和田成美堂」が二大業者であり、どちらの店舗も「別府の浅草」の異名をもつ繁華な松原公園の近くに立地していた。

大正6年（1917）『大分県人名辞書』によれば萩原号の創業者は安政6年（1859）生まれの萩原定助であり、萩原は別府のみならず大分県下における絵はがき製造発行の創始者であるという。淡路島の南端にある福良町の出身で、元は干物商と質屋をなりわいにしていた。明治31年（1898）か32年頃に別府へ移住し、絵はがきの発行をはじめている。萩原定助の名が記される出版物には、『十湯温泉案内』（明治42年）、『別府温泉誌』（大正元年）などが確認でき、絵はがきに加えて別府の案内本製作を手がけていたことがわかる。残された萩原自身の肖像写真は、がっしりした肩に眼光鋭く角張った顔をした和服姿の男で、われわれがつい抱きがちな感傷的で儚い「絵はがき」のイメージから遠い。絵はがきの印字からは萩原号・和田成美堂のほかにもかなりの発行所が確認でき、別府ではいったいどれだけ多くの絵はがき発行者と写真師が活動していたのだろうかと考えさせられる。絵はがきの販売に携わった人も含めて、絵はがきで生計を立てていったものたちの裾野は広そうだ。絵はがきの売り場のひとつは有名な温泉浴場の前など、人の往来が多い路上であった。絵はがきを売る人物が写真絵はがきに写り込んでいることもある（図3）。

別府で写真絵はがきがつくられるようになったのは明治38年頃以降で、日本における写真絵はがきの創始期かつ黄金期であった日露戦争直後の時代を正確に追いかけている。のちに竹久夢二の妻となる岸他万喜が早稲田鶴巻町に絵はがき屋を開店したのは明治39年のことだった（細馬宏通『絵はがきの時代』青土社、2006年）。夢二は他万喜の店に自作の絵はがきを卸していた。絵はがき屋はさほど資本を要さず手軽にはじめられ、しかもその頃かなり繁昌が見込める商売だった。別府の写真絵はがきは、温泉町として急拡大していく別府に流れ込み、生計を立てようとする人々が手にした職の一端だった。

写真絵はがきによる〈別府〉史

写真絵はがきに切り取られた別府と、文献史料や地図史料などから再構成される別府とが同じ輪郭を描くことは決してない。そこからは絵はがきに写されたものと写されなかったものとが、図と地のようにして浮かんでくる。写真絵はがきと文献史料はどちらも資史料として可能性と限界の双方を持ち合わせているわけだが、それぞれが描きだす〈別府〉の姿のズレにこそ、写真絵はがきが切り出す都市のかたちの特徴がみえてくるように思える。

別府の町にとって写真絵はがきとは、ありのままの別府の姿を伝えるものであった以外に、この都市が浴客を集めることで栄える温泉町である以上、町のイメージを伝えるという役回りを託されていた。風雅な雰囲気が重ねられる場所、繁華な賑わいが期待される町並み、浴場施設の壮麗さを喧伝する建築、市街の空撮によって別府の躍進を誇

図3. 写真絵はがきに写り込む絵はがき売り（明治末期〜大正中期）

図4. 絵はがき（タイトルなし，松屋別荘，明治末期）

示する絵はがき。それらからは特定の場所や構図に込められた写真師や発行元の意図が感じられる。

しかし別府の写真絵はがきには、そのような目的だけに照らせばこんなものまでと思うような素材を取り上げたものも少なくない。なかには別府の住人が手に取ってこそ意味を発揮した絵はがきもあるように思える。写真絵はがきが切り取る別府の光景が紋切り型であったかといえば、決してそうではなかった。

蝶子と柳吉の世界

別府の写真絵はがきは、温泉町の威容や近代化を誇るような建築や町並みのほかに、一見ごく何でもない建物や町角も写されている点が魅力である。しかもそのバリエーションがひとかたではない。

あるひとつの旅館の建物について、わずかな時間差で別の写真絵はがきが作られていることも珍しくない。一軒の旅館の増改築状況が数年単位で追えることさえある（図4、図5）。ここで重要なのは、その旅館が別府において決して特別な建築だったのではなく、無数にあった旅館の一軒だということだ。その旅館の増改築の履歴が別府の町の近代史において重要な出来事であったとは思えない。しかしそれは紛れもなく、温泉町別府を下支えしてきた建物、商売、人の歴史である。その意味で別府の写真絵はがきは、この町の中核を支えた、無名の建物や人々の歴史へと向かう無数の入り口でもあろう。

ただそのなかでも注意しなければならないことがある。旅館を例にとれば写真絵はがきに写るそれは経営規模などの点において中間層以上のものだったといえる。昭和10年（1935）『温泉大鑑』に収録される旅館約250軒の規模と軒数を検討してみると、別府の旅館の8割5分以上は、収容人数が70人以下程度で客室は25室以下の中小旅館である。この規模の旅館の経営は短期間で移り変わっていることが多く、都市においてかなり流動的な存在であり史料上に追いかけていくことは難しい。写真絵はがきにもその姿が残されることはほとんどない。つまり写真絵はがきには旅館業の社会と空間における下部構造は写されていない。

大阪を舞台に描かれた織田作之助の小説『夫婦善哉』には続編がある。主人公の蝶子と柳吉は、景気がいい別府で一旗あげることを夢見てこの町にやってきた。別府には、無名かつ無数の蝶子と柳吉が、活計のすべを探し求めて流転した末にたどりつき、ささやかな商売を興した姿があった。蝶子と柳吉には、織田作之助の次姉である山市千代とその夫の虎次という具体的なモデルがいる。千代・虎次夫妻は昭和9年（1934）に大阪から別府へやってきて中町（図6）で理髪・電気器具店を開き（蝶子と柳吉も同じ）、そのあと割烹「文楽」と旅館「文楽荘」などを営んだことがわかっている。千代と虎次、蝶子と柳吉が営んだような店の姿を写真絵はがきに見つけ出すことはかなり難しい。別府の写真絵はがきを眺めたときにその背後に広がる温泉町の分厚い下部構造あるいは一般構造を想像しなければ別府の見方は片手落ちであろう。写真絵はがきが切り取った膨大な数の〈別府〉像のほとんどは、この町をかたちづくる建築や社会の最上層部でも最下層部でもない、分厚い中層部だった。それが写真絵はがきの〈別府〉である。

「絵はがきの別府」展

本の刊行から半年ほど経った11月、別府駅にほど近い小さな近代建築を会場に「『絵はがきの別府』展」を開いた。会期は2週間限り、展示設計から設営まですべて手作り急ごしらえの展覧会だったが別府でつくられ各地へ飛

図5. 絵はがき「別府海岸通り 旅館松屋別荘」（大正中期）

図6. 絵はがき「中町市街通り」（大正中期〜末期）

び立っていった絵はがきを何らかのかたちで一度別府へ引き戻してみたかったのである。会場として貸して頂いたのは昭和初期築の草本商店という建物で、別府の絵はがきに個別にはほとんど写されなかった部類にあたる商店建築である。「三白」と呼ばれた砂糖や粉などの卸業を営む店で、白い外壁には黒いタイルで屋号と三白の品名が書き出されている。草本商店が建てられた昭和初期の別府とは二度の博覧会を開催するなど特に勢いがあった時期で、写真絵はがきもたくさんつくられた。同店はいま広い国道沿いに店舗を移して営業されており、駅から海までの街区を構成する細い道「北浜通」に面するこの旧店は長年閉め切られていた。

絵はがき展の会期中には、同じとき大規模に開催中だった別府現代芸術祭からの若い来客のほか、本を携えて来てくださった絵はがきに写る旅館のご子孫たちをはじめ、瀬戸内の諸港と別府とを行き来する関西汽船の元船員、戦後すぐに身一つで別府へ来て40年にわたり仲居などをつとめてきた女性（今は一人でおでん屋を営んでいる）、踊りの師匠だった男性、食堂をしていたが終戦直後には草本商店へ勤めていたという90代の男性など、実にさまざまな方が訪れてくれた。

古びた部屋の壁へ大きく引き延ばしてプロジェクションした写真絵はがきの画像は、80代から90代の来場者にとってさえ、それぞれの最も古い記憶より一世代かさらにそれ以上前の光景である。それでも絵はがきと自分自身が生きた〈別府〉とをつなぐ、わずかだが具体的な手掛かりは次々と見つけ出されて、会場には途切れることのない別府語りが紡がれていった。わたしはその瞬間瞬間に立ち現れてくる無数の〈別府〉に耳をそばだてるので精一杯だった。

News Letter 都市史研究 Vol. 73
2013年3月18日発行

事務局：〒113-0033　文京区本郷7-3-1　東京大学大学院工学系研究科建築史伊藤研究室内
編集担当：髙橋元貴（東京大学大学院工学系研究科建築学専攻）
レイアウト原案：岩本馨（京都工芸繊維大学大学院工芸科学研究科）